

【書評】

空閑浩人 著『ソーシャルワークにおける「生活場モデル」
の構築—日本人の生活・文化に根ざした社会福祉援助—』
(ミネルヴァ書房, 2014年, A5判, 256頁, 6,000円)

結城俊哉
(立教大学)

本書の書評を引き受けたことを僕自身、正直に申し上げるならば、実はとても気は重かったのだが、今は、楽しい時間を過ごすことができた仕事であったことをのべておきたい。

なぜなら、空閑氏(=以下、著者とする)は、本書の「はしがき」の部分で以下のような宣言と出会って、僕は内心、非常な驚きと興味をそそられた。

「本書は、日本人の生活や文化に根ざしたソーシャルワークのあり方、すなわちソーシャルワークの『日本モデル』としての『生活場モデル』を構想したものである。ここでいうソーシャルワークの『日本モデル』とは、日本人の生活や文化に根ざした生活支援とその実践を担うソーシャルワーカーの経験を大切にしたい、いわば『日本流』のソーシャルワークのかたちである。そしてその『日本モデル』研究から具体的に見いだされたソーシャルワーク・モデルが『生活場モデル』である」(空閑 2014: はしがき)

しかし、まず一度読み終えた際、著者の提示する「日本モデル」から導かれたソーシャルワークにおける「生活場モデル」というものが、僕の中でなかなか具体的な焦点を結ばないことになんかの苛立ちと戸惑いを感じていた。僕は、まずは「やれやれ」とつぶやき、それまで読みながら自分の中で生じてきていた何か小さな違和感をつなぎ止め、まるで迷路の中を歩くようにしながら再度、

本書を静かに読み進めてみることにした。

前置きが長くなってしまったが本書で書かれている内容について確認し内容を正確に理解する意味において、この書評を読んで下さっている方のために、本書の目次構成を以下に示しながら内容についての確認作業からはじめてみたい。そして、読者は、著者が展開する自説の議論を裏づける論証として引用されている幅広い学際的領域に渡る博覧強記的な文献量のおびただしさに圧倒されてしまうであろう。

それは、おそらく従来のソーシャルワーク論を展開する視点で多く見られた欧米文献の紹介を超えて、この「日本」という国の中でしかも市井を生きる人間の生活と文化を基盤とした「日本人」のためのソーシャルワーク論を構築するためには必要不可欠な挑戦的試みであると理解できたのである。

今回、書評を担当した立場として、著者の論理展開についていくことに関する自己の未熟さを痛感することになった理由でもあるが、しかし、本書を貫いている著者の思い・願い・そして希望と呼べるものに大いなる共感と賛同を抱いたことをまずは、最初に申し上げておきたい。

それでは、僕自身の浅学をおそれずに、その内容の一端を紹介させていただきたい。本書の構成(骨格)は、全体がⅠ～Ⅲ部構成と章立てが序章～終章までの第11章構成となっている(以下で、各部の基本的概要を述べてみよう)。

序章 ソーシャルワークの「日本モデル」とは何か

*第I部 「社会福祉援助」としてのソーシャルワークの基盤

第1章 人間の「生(ライフ)」への視点と「かかわり」の意味

第2章 ソーシャルワークにおける「ソーシャル」の意味

第3章 「生活」とその「主体」としての個人への視点

この第I部(第1章～第3章)における論点は、社会福祉援助および生活問題を認識する際のキーワードとなる「生:ライフ/Life」の視点への捉え直しと「かかわり/かかわりの継続性」についての議論が検討される。社会福祉における生活問題について、リアル(=具体的でかつ現実的)な解決/緩和/解消が求められているものであることを外すことなくソーシャルワークの中心概念に置き生態学的視点を手がかりとして検討がなされている。さらに、生活問題/生活困難を抱える個人=「主体性」とは何かについて読み手に率直に問いかけてくる。

*第II部 日本人の生活・文化と「生活場モデル」の構想

第4章 「世間」に生きる日本の「個人」へのソーシャルワーク

第5章 「受身的」な対人関係と日本人の「主体性」への理解

第6章 「場の文化」に基づく「生活場モデル(Life Field Model)」の構想

この第II部(第4章～第6章)では著者がめざすソーシャルワークにおける「日本モデル」と「生活場モデル」の基盤となる概念を検討し、その内容は、いわゆる「日本人論」および「日本生活文化論」としても理解することができる非常に示唆に富むユニークなものである。ここでは、「世間」と「個人」そして、「場の力」としての「日本文化

のフィールド(=生活の場)」という社会学的な概念がキーワードとなって論述が展開されている。

*第III部 「日本モデル」としての「生活場モデル」の展開

第7章 「生活場モデル」の基礎となる「生活」へのアプローチ

第8章 日本人の「生活場」としての「家族」へのアプローチ

第9章 日本のソーシャルワークとしての「生活場モデル」の展開

この第III部(第7章～第9章)は、本書の真骨頂(核心)を示すオリジナルな理論構築がなされ、読み応えのある部分である。ここでは学生の実習記録や実習指導者(ソーシャルワーカー)の記録(インタビュー/言葉)を手がかりとしながら、「生活支援とは何か」「家族支援とは何をどうすることなのか」、そして「日本人の生活・文化に根ざしたソーシャルワーク=生活場モデル」の展開方法とは何かを中心としてソーシャルワーク実践の内容分析を基本とした論述がなされていく。

読者は「なるほどそうか!」と理解できる部分と、ある部分では、読み手側の援助者としての成長過程・発達段階や臨床経験レベルの中で未消化にならざるをえない部分もあるだろう。しかし、そのような部分でも、ある程度の時間をおいて読み返した時に腑に落ちてくる内容であるのかもしれないと思う。

ここでは、著者のソーシャルワークの理論研究と実践研究の融合の中から誕生を目指した「生活場モデル構築」への熱い思いを、確かな手応えとして切実に感じる事ができた。

終章 ソーシャルワークの「日本モデル」の発展と成熟

ここから以下は、今回の書評のまとめとして読みながら考えた個人的見解も含めて述べてみたい。

この著書を読み込むために、各自が関心のある章から読み始めることはあまりおすすめできない

読み方だと思う。その意味では、本書の成り立ちを理解しておくことがそのための前提条件として必要である。

つまり、本書の第1章～第8章までは、著者がこれまでの研究活動の成果として学会・機関誌等で既に発表した論文を博士論文として収録し再構成したものである。それに関連して当然ながら内容的には加筆および修正がなされてもいるが、この本のパズルのように組み立てられた構造を理解しないまま読み始めるとおそらく著者の伝えたい真意を受け止め損なう危険（リスク）がある。

その意味では、新たに書き下ろして全体を俯瞰した視点から論述された序章と、特に終章に注目して読み込むことをお勧めしたい。

まずは、序章「ソーシャルワークの「日本モデル」とは何か」からである。ここでは本書を貫くソーシャルワークの「日本モデル」への自らのこだわりについて、思いは熱いが、眼差しはクールに論述が展開されている。

なお、序章「ソーシャルワークの「日本モデル」とは何か」は、以下の4節で構成されている。

1. なぜソーシャルワークの「日本モデル」なのか
2. 日本のソーシャルワークが「よってつつゆえん」
3. 「日本モデル」を支える「準抛枠」への問い
4. 本書の構成と概要

そして、<序章>の第4節：本書の構成と概要は、まさに本書の各章の概要が簡潔明瞭に述べられている部分である。しかし、だからこそ、ここだけを読んで全体の内容の理解が出来ると思ってしまっただけでは著者の意図が理解できないことになる。

この部分は、あくまでも基本的に各章のイントロダクション（導入部/ガイド）として理解することにとどめておきながら各章の詳細な論述を読み込む作業に入って頂きたいと願う。

そして、全体のまとめとしての終章「ソーシャルワークの『日本モデル』の発展と成熟」に注目してみたいと思う。

この章は、以下の3節で構成されている。

1. 「日本国籍」をもつソーシャルワーク研究
2. 「日本モデル」の発展・成熟のための「実践の言語化」
3. 実践感覚や現場のリアリティに関与し続けること

<終章>の出だしから、著者は、1. 「日本国籍」を持つソーシャルワーク研究と題して、「学問には、故郷や国籍が必要」であると正面から切り込んでくることに僕は個人的な意味で深い驚きを抱いて読み始めることができた。

具体的に著者は、以下の文章を述べて終章の開始を宣言するのである。

本書のねらいは、日本人の生活や文化に根ざしたソーシャルワークのあり方、すなわちソーシャルワークの「日本モデルを見出すことにあった。そのための取り組みとして、日本人の生活および生活の価値観や行動様式、習慣などの文化（日本人の「場の文化」）に根ざした「生活場モデル」を提示し、日本の社会福祉現場で働くソーシャルワーカーなどの福祉専門職による言葉を取り上げながら考察を行なってきた。」（空閑 2014：終章）

僕は、再度この終章に辿り着いたときに、著者の意図についてとても強く共感することができた。と同時に、ここまで著者が「ソーシャルワーク」という言葉を使い続けていることに関してもかなりの違和感を抱いてしまっていた。

つまり、「日本モデル」へのこだわりというのであるのならば、ソーシャルワークに替わる「言葉（日本語の表現）」への言及をさらに求めたいと思ったのである。

日本におけるソーシャルワークのあり方について著者と同様なこだわりを抱いていた窪田暁子氏（2014年逝去）が、最後に出版された『福祉援助の臨床：共感する他者として』（誠信書房、2013年）という著作において、詳細は省くが「ソーシャルワーク」ではなく「福祉援助の臨床」という言葉

を用いられていたことは記憶に新しいし、著者もその意義を高く評価している。それであるならばなおのこと、著者にはさらなる今後の「日本人及び日本の生活文化論」に相応しい「援助理論の実践展開」を表現することへの尽力を今後も大いに期待したいと願っている。

同様に僕自身も日本の文化社会論と民俗学的視点から社会福祉分野にとどまらずに幅広く看護、心理、教育に携わる「対人援助職の担い手(=ケアの担い手)」に向けた対人援助論の構築を目指した『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法を考える』(高菅出版, 2013年)を以前に出版した経緯もある。

その関係で今回の書評を担当するご縁を頂けた

のだろうと思っているし、書評の担当者として空閑氏のこの著書に接することができたことで、まことに勝手ながら自分と共通する日本における対人援助実践における研究的関心と感性を持つ仲間(同志)を見出したような喜びを感じている。

本書は、日本におけるケアの担い手(援助者)が日々迷い、思い悩んだ時にそつと手にとって読まれることで再度、今の自分の仕事の使命(ミッション)とその役割、そして自己の進むべき新たな方向性を見出すことができる貴重な里程碑となりうる稀有な書物である。是非、ソーシャルワーク教育や臨床指導者、実践現場の中でその仕事を担っているワーカー達の手元へ届けて欲しいと願わずにいられない。